

3. 各大学におけるこれまでの実績及び本事業において実施を計画している内容について

【各大学4ページ以内】

大 学 名 西九州大学

○学生の社会的・職業的自立のため取組のこれまでの実績について【2ページ以内】

西九州大学は、学生の社会的・職業的自立のために①「全学共通教育における3科目（3単位）の新設」②「キャリアポートフォリオの活用」③「あすなろうセンターの整備」を3つの柱として教育改善を進めてきた。特に、就業力育成のための正規科目を設定でき、初年次にそれを必修科目として全学共通教育に導入した意義は大きい。全学を挙げてカリキュラムポリシーの根幹部分に「幅広い職業人としての資質能力の向上を可能とする」科目設定を行なった。本学の専門職業人養成の基盤に、学生の社会的職業的自立のための科目を組込んだわけである。もちろん、これら3つの柱以外にも新科目に関する教科書の作成、教育改善のためのFD/SD活動、学習成果発表会、各種評価等も行なっているが、以下に3つの取組の実績を述べるに留める。

① 全学共通教育における3科目（3単位）の新設

本取組では、従来の各学科と教務課並びに学生支援課による専門職業人養成システムに加え、幅広い職業人としての資質能力の向上を可能とするために、新しい教育プロセス「あすなろう体験Ⅰ～Ⅲ」を共通教育科目に開設した（図1）。本取組の根幹となる科目「あすなろう体験Ⅰ（基礎）」を1年次の全学必修科目として平成23年度に開設した（子ども学部のみ25年度導入）。授業は、少人数ゼミナール形式で通年隔週開講とした。主な内容は、キャリア・ポートフォリオの作成および活用法の修得、社会人基礎力の理解、ボランティアや地域活動等の学外体験活動への参加である。学外体験活動では、ポイント制を導入し、学生自ら楽しくポイントを集め、振り返りができるようなシステム（応募からレポート提出までを管理するウェブシステム）を構築した。このシステムは、全て本学ポータルサイト内に格納され、学生と担当教員との間で双方向コミュニケーションが可能となる仕掛けである。これにより、活動ごとに教員からの指導を受けることで、学生がPDCAサイクルを意識した活動を行うことができるようになった。体験活動の内容は、様々なステークホルダーが主催するセミナーへの参加や地域や施設などへのボランティア参加に始まり、東日本大震災復興支援ボランティア参加まで多岐にわたった。本科目を履修した学生数は23年度1年生297人、2年生15人にのぼり（2年生は旧カリキュラム）、参加活動件数215件、延べ人数1700人を上回った。学生の派遣先から、本取組への評価、学生への評価ももらっているが、いずれも高評価であった（取組97%肯定評価、学生97%肯定評価）。学生に望む点について「計画力」「創造力」などが挙げられているが、これらは今後の改善課題と考えている。

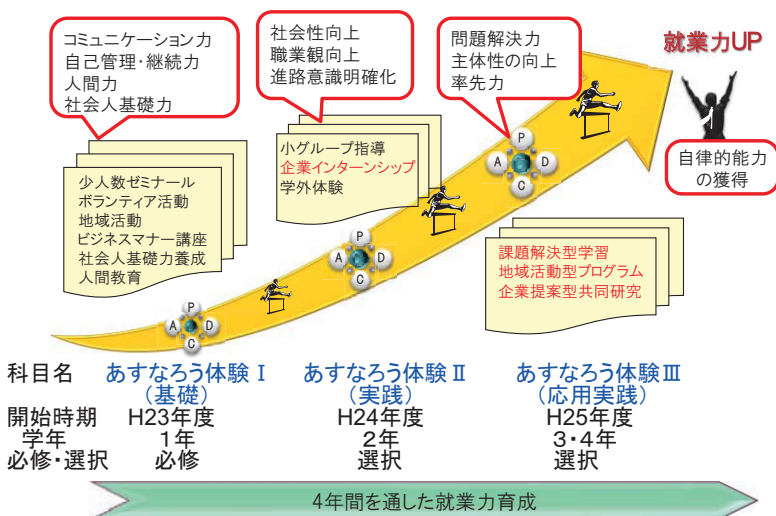


図1. あすなろう体験の流れ

また、履修学生の社会的・職業的自立に関する意識調査を行うため、社会人基礎力確認テストをオリジナルで作成した。これは、経済産業省が提唱している社会人基礎力（3つの能力、12の能力要素）を意識レベルと行動レベルとに分け、分かりやすい設問を設け、答えやすいよう工夫したものである。実際に、「あすなろう体験Ⅰ（基礎）」の履修開始時（23年5月）および修了時（24年1月）の2回テストを実施した。その結果、25年度から実施予定である子ども学科の学生に能力の伸展がほとんどなかったのに比して、本科目を受講した学生（例：健康栄養学科）においては、ほとんどの能力が高まったことが明らかとなった（図2）。また、学生による授業評価を行ったところ、約8割が社会人基礎力がついたと実感し、約7割が学習意欲が湧いたと回答するなど、高い評価が得られた。

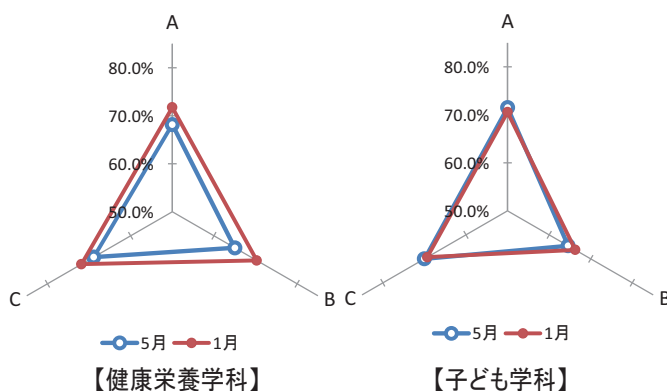


図2. 社会人基礎力テストによる3つの能力の達成度
(A:前に踏み出す力、B:考え抜く力、C:チームで働く力)

平成24年度からスタートした「あすなろう体験Ⅱ（実践）」（選択科目）は、「あすなろう体験Ⅰ（基礎）」で修得した基礎力を学生が主体的に高めることを狙いとしている。履修学生はインターンシップや専門分野にとらわれないボランティアや地域活動への参加・参画により、多様な社会人と協働する機会を得ている。また、学内では、学内インターンシップの機会や下位学年の学生を指導するピアサポート集団などを形成させることを通して、学科・学年の枠を超えた小グループで課題解決型学習を体験し、実践的な能力を高める学習を行なっている。

さらに、平成25年度から開講する「あすなろう体験Ⅲ（応用実践）」（選択科目）は、より高度な社会形成能力の向上をめざし、学外組織と連携した仕掛けづくりを行う。その仕掛けの場所は学内外を問わない。課題解決型・プロジェクト型の学習体験が得られる仕組みづくりが目的であり、学内を主なフィールドとした教員主導型体験学習、インターンシップ先を主なフィールドとした地場企業や地域ステークホルダーとのコラボ型学習、両者のフィールドをまたがった学習など様々な展開が可能であると想定している。また、履修した学生の学習到達度を判定するためのルーブリック等の整備も計画している。

② キャリア・ポートフォリオの活用

学生自身のこれまでの活動を記録させ、自己管理し、振り返ることで成長を可視化させることを狙いとしている。キャリア・ポートフォリオは、システム上担当の教員がきちんとチェックするような仕掛けをしており、学生一人一人に今後の活動に対しての助言を与えている。また、このシステムは、SNSを付帯し、ゼミや授業等はもちろんのこと、サークルなどの課外活動でのコミュニケーションツールとしても有効に活用している。さらに、SNSに学外機関や卒業生を参加させることができ、学内外ステークホルダーからの支援も可能となった。

③ 「あすなろうセンター」の整備

本取組の母体となる「あすなろうセンター」を設置した。各学科、学生支援課、教務課と連携を計りながら、「あすなろう体験」関連科目の運営、学外体験活動支援、企業インターンシップの推進、在学生へのワークライフバランス相談、卒後支援等を行っている。これまで、本学には「教育と就業」を結び付けて包括的組織的に支援する組織がなかったが、あすなろうセンターの設置により、両者を有機的に連動させる仕組みを作ることができた。

○本事業において実施を計画している内容について【2ページ以内】

1. 9大学連携で実施、サブグループでの「インターンシップ」の取組

9大学からなるサブグループで取り組むインターンシップでは、①各大学の事例の共有化と高度なインターンシッププログラムの開発（平成24年度）、②開発プログラムの9大学での試行（平成25年度）、③実施ノウハウの集約化、インターンシップ継続のための仕組み作り（平成26年度）を行う。本学は上記①～③を以下の仕方を実施する。

2. 西九州大学での取組について

企業が求める人材について、（社）日本経済団体連合会による「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果」（平成23年1月18日）において、大学生の採用に当たって最も重視する能力は、「主体性」であった。本学のアンケート調査（対象：本学の卒業生の就職先）においても、企業側が求める大学在学中に身に付けてほしい能力は、「主体性」との回答が最も多かった。また、本学在学学生への意識調査（社会人基礎力確認テスト）でも、低位に推移した項目は、主体性（前に踏み出す力）、創造力（考え抜く力）であった。つまり、「指示されたことはできるが、自ら考え行動することができない」学生が多くなってきているのが現状である。

本取組の目的は、学生の「主体性」および「創造力」を伸展させる教育改善である。その実現のためには、教員や指導者の話を一方的に聞く受け身の授業・活動でなく、討論・発表重視型、ワークショップやフィールドワークを取入れた体験型、企業や地域と連携した課題解決型等のアクティブラーニングを取り入れる必要がある。また、産業界が求めるグローバル人材の育成に対応するため、海外インターンシップを取り入れる。これにより、異文化への適応力を身に付け、チャレンジ精神を高める機会を与える。

本事業では、現在「あすなろう体験科目Ⅰ～Ⅲ」（以後、体験Ⅰ～Ⅲと略す、体験Ⅲは25年度開始）で実施している授業内容をインターンシップをキーワードとして再構成することで、上記能力伸展に的を絞った改善を施す。**体験Ⅰ**では、これまで行ってきた少人数ゼミナールによる社会人基礎力の養成、学外体験活動を継続して行うこととする。これまでに寄せられた改善要望を整理し、学生が体験活動に臨む際の事前指導を十全に施すためのノウハウの整備、指導法の改善、体験活動管理ウェブシステムの改修に努める。これによって、体験活動に臨む学生が体験を経るごとに能力伸展が図れるようPDCAサイクルの徹底を図る（24～25年度）。今後は体験Ⅰを、本格的なインターンシップ（体験ⅡおよびⅢ）を行う前のいわば、「**プレ・インターンシップ**」と位置付けていく。

体験Ⅱでは、学内インターンシップの機会や下位学年の学生を指導するピアサポート集団などを形成させることを通して、学科・学年の枠を超えた小グループで課題解決型学習を体験し、実践的な能力を高める学習を行うとともに、学外インターンシップの体験を行っている。今後は、この学外インターンシップを海外でも行えるような仕組みづくりを行う。具体的には、海外で交換留学生の協定を結んでいる大学（韓国、タイ等）をベースに当該国日本人会、日本企業との間でインターンシップ派遣の可能性を探る調査を行う。異文化体験と就業体験を組み合わせた試行プログラム「**グローバル**」型インターンシッププログラムの開発および試行を目指す（24～25年度）。

体験Ⅲは、その仕組み上、体験Ⅱの単位を取得した者が履修対象者となる。この科目では、より高度な社会形成能力の向上をめざし、学外組織と連携した仕掛けづくりを行うのであるが、その仕掛けのテーマとして地元企業や団体と密着した「**地産地消**」型インターンシッププログラムの開発および試行を掲げる。体験Ⅱで異文化での就業体験を経てグローバルな視野を獲得した学生に、今度は自分の生活する地域に目を向けて欲しいというプログラムである。インターンシップを行う場

所は学内外を問わない。地域に密着した課題やプロジェクトを解決・実践する学習体験が得られる仕組みづくりが主要な目的であり、学内を主なフィールドとした教員主導型体験学習、インターンシップ先を主なフィールドとした地場企業や地域ステークホルダーとのコラボ型体験学習、両者のフィールドをまたがった体験学習など様々な展開がありうると想定している。この授業は教育プログラムではあるが、企業や地域が抱える現実的な課題を取り扱う。したがって、各ステークホルダーは受益者ともなる。企業にとっては、戦略的な人材育成と人材マネジメントの革新、学生の斬新なアイデアの利用につながる。地域も若い力による町おこしを期待できる。大学にとっても、社会のニーズに応えた教育の実質化、共同研究の推進にもつながる。24～25年度にかけ、あすなろうセンター職員を中心に、地域の各ステークホルダーとの間で課題の掘り起こしやプロジェクトの設定に積極的に取り組むとともに、授業実施計画を作成および実施する。以上の流れを下図にまとめる。

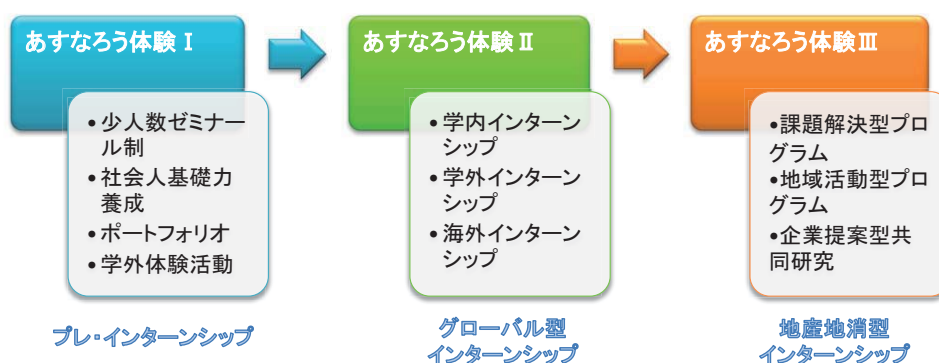


図 あすなろう体験 I ~ III の流れ

また、大学側、企業等側の双方でループリックによる評価を行い、プロジェクトの進捗具合、到達目標の達成度を確認するための準備・試行を行う（25～26年度）。また学生自身もループリックによる評価を行い、目標の確認と振り返りを常に行うようにする。これらのループリックは、ポータルサイト上で確認できるようシステムの改修を行う（25～26年度）。また、実施から評価に至るまでの本学の経験をもとにグループ内でのモデルプログラム作成に寄与する（26年度）。

さらに、本学 SNS を改修し、利用しやすくことで（25～26年度）、学内外の関係者および連携校との連絡や情報のやり取りがオンラインでできる他、それぞれが保有する情報やノウハウを共有化し、お互いに知見を高め合える場とすることが期待できる。

3. 大学および産業界との有機的連携について

大学での学修内容が、実社会のニーズを反映しておらず、学生の将来のキャリア・パスに繋がっていないことが指摘されている。一方で、企業側にとっては、単なる利益を優先するだけではなく、教育的な配慮のもとでインターンシップを受け入れていただかなくてはならない。このような大学教育内容と産業界のニーズとのギャップがないよう、本取組では、あすなろうセンターが中心となり、本学連携企業等側との連絡協議会を定期的に開催することとする。むろんインターンシップグループ内の各校とも有機的に連携しながら、常に改善を図ることとする。

4. 支援期間終了後の取り組みについて

本取組は、支援期間終了後も PDCA サイクルにより、内容を改善・充実させながら、継続して実施することとする。SNS 等を用いた学外との連携体制などを利用することで無理なく継続して取り組みを遂行でき、必要な経費が生じた場合にも大学の経常経費に組み込むこととし、本取組をさらに発展させていく予定である。